

高田敏子編

わが詩わが心(1)



わが詩わが心(2)

「野火」32号から99号までに収録された作品と、
本誌にも収録されている数人の方々、合わせて
79人の詩人による自作自註で構成。

高田 敏子 編／酣燈社 刊／A 5 判／192頁／定価 1200円

わが詩わが心(1)

定価 一、二〇〇円

昭和五十七年七月十日 初版印刷
昭和五十七年七月二十日 初版発行

編 者 高 田 敏 子

発 行 者 真 島 正 敏

編集協力 凱 風 社

印刷所 凸版印刷株式会社

発 行 所 株式会社 酣燈社

東京都中央区銀座六ノ八ノ七

交詢ビル六階 (〒一〇四)

電話 ○三―五七二―三四二一

郵便振替東京七―一九四九七七

◎一九八二 検印廃止

高田敏子編

わが詩わが心(1)

はじめに

はじめに、自分のことを書くのは、ためらわれるのですが、ここにまとめられた、詩人方の「自作自註」についてをのべることは、やはり、私のことからなってしまう。私が詩に触れはじめたのは、十代半ばを過ぎたころからで、私にとって、詩人とは不思議な、普通の人とは違う、別世界の人のように思われました。

その思いは長くつづいて、三十代のはじめ（昭和二十二年ごろ）、詩人にお会いする機会を持つようになったとき、その方々が、普通とは変らない生活者でいられることに、また不思議を持ちました。

詩人の心は作品の中に。それで十分ではあっても、普段は隠されている詩人そのものに、詩を生み出す心のあり方に、私は近づきたい願いを持ちました。

その願いを長く持ちつづけて、昭和四十一年一月創刊の「野火」誌に「自作自註」としての玉稿をいただき、連載をして来しました。

『わが詩わが心』は、詩人の皆様が、私の願いに答えて下さったことから生まれました。

生活の中に込められた詩人の目、詩の心は、詩に親しまれる方ばかりでなく、どなたの胸も打つことでしょう。詩の心の根本は、生そのものへの愛であり、謙虚に、誠実に、真実に、生に向かい合う心であることを、私は学ばせていただいて来ました。

生への愛こそ、地球の平和につながるものです。無気味な危機感を持ついま、一層に、愛の目をとどかせる大切さが思われます。

高田 敏子

目次

秋	尾崎喜八	10
Adagio	新川和江	12
いまふりかかり	坂本明子	15
重い火	辻井喬	18
女湯	石垣りん	22
折れた葦	森田勝壽	24
河童	阪田寛夫	26
紙風船・海	黒田三郎	28
稀薄な部屋	北園克衛	30
樹に寄せて	西垣脩	32
熊影	八森虎太郎	34
故郷	伊藤信吉	36
コル	鳥見迅彦	38
五十日の夜	犬塚堯	40
暦のうた	芥川瑠璃子	42

午後の噴水

春殖・冬眠・ぐりまの死

倒さの草

三月のうた

白い建物のなかに

小銃記

しぼんだ夏

少女

白い馬について

時効

青春の魚

蕎麦の秋

空の何処かに隠れていて……

竹の歌

旅に出ることは

高千穂初日 写家・浜谷浩の歌える

小さな娘が思ったこと

内山登美子

草野心平

小山正孝

谷川俊太郎

菊地貞三

安西均

牧章造

中桐雅夫

安藤一郎

赤間太郎

村野四郎

三谷晃一

吉行理恵

伊藤桂一

御木白日

堀口大暉

茂木のり子

44

47

50

52

54

57

60

62

64

66

68

70

72

74

76

78

80

ちがった意味	長島 三芳	82
掌の中の卵	壺井 繁治	84
天の耳	丸山 薫	86
土民の手	小野十三郎	88
鳥	川崎 洋	90
二月の花	宗 左 近	92
合歓の花歌	野田宇太郎	95
白 鳥	丸山 豊	97
葉・木の葉	笹沢 美明	100
日付のない日記	中村 千尾	102
フランシス・ジャム先生	吉野 弘	104
二つの世代	岡本 潤	106
風 景	黒木 清次	108
ハーケンの歌	秋谷 豊	110
北方へ帰る山鳩・富士ビューホテルにて	田中 冬二	114
ボボフの機関車	緒方 昇	116
真昼の乙女たち	中村真一郎	120

水辺・エデンの妻	嵯峨 信之	122
み　　ち（絃子に）	三井ふたばこ	124
見　　る	滝口 雅子	126
村の地藏さん	戸田 正敏	128
村の春	堀内 幸枝	132
夜のうた	深尾須磨子	134
流　　星	井　上　靖	136
ロック・クライミングの唄 若い山の友へ	山本 太郎	138
若葉よ来年は海へゆこう	金子 光晴	140
私はその人を征服したのだろうか	永瀬 清子	142
わ　　かれ	山下 千江	144
忘れた秋　五の歌―母秋子に	岸田 衿子	146
虫　　音	高田 敏子	148

イラスト／渡　まゆ

装丁／高橋 京子

わが詩わが心
(1)

高田敏子編

秋

尾崎 喜八

父よ、秋です。朝です。

あたらしい日光です。

山々がなんとまじめに、物思わしげに横たわり、
木々がなんと単純に落葉おちばしていることでしょう。

旅びとの川が遠くから今朝着きました。

棕鳥ひぐどりの一群が今日のはじめて野に散りました。

まるい、明るい、粟あわの穂が

老いたる者のたなごころの上で鳴ります。

雁来紅はげいとうの赤い、村落の見える風景から、

あなたの青空の雨を追いやらないで下さい。

すべての到着したものは此処ここに滞在し、
古くから在るものはいよいよ処を得るでしょう。
豊かな形象にそれぞれ秩序の陰影をあたえ、
もっとも貧しい者をも

「在ること」の偉大で鼓舞して下さい。

わたしも今日は遠く行かず、
家をいで、立ちどまり、やがて帰り、
つねに周囲の空間を身を感じ、
深く目ざめて世界と共にあるでしょう。

自作自註

リルケ研究の權威でもあれば私にとってのドイツ文学の学兄でもある親しい富士川英郎さんは、この詩を読んで「リルケを踏まえながら云々」と賛辞を呈して下さったが、それは彫刻家ロダンに精通し傾倒している人が、若いブールデルの作品を褒めたのに似ている。詩の形こそ或る時代のリルケに、とりわけ茅野蕭々氏が訳された「時禱詩集」時代のリルケに通じるところは持っているものの、この詩を貫いている精神に至っては、必ずしも彼の影響下にはないのである。私はこれを書いた頃の自分をリルケよりもっと敬虔で、もっと現実的で、且つもっとヒューマニスティックだったと思っている。そして私のこういう傾向なり信念なりは、四十年後のこんにちといえども尚変らない。

その頃私は昔で言う東京府豊多摩郡高井戸村の田舎に住んでいた。父に金を出してもらって建てた新築の小さい家は、三方を広い麦畑で囲まれ、うしろに二、三軒の農家を控えて、その向うは雑木林や杉林。言わば名ごりの武蔵野の片隅にあった。毎日金にもならぬ詩を書き文章を書き、年若い妻と二人でいささかの野菜を作ったり鶏を飼ったりしながら、好きな自然の中の貧しくはあるが自由な楽しい生活だった。今ではそれぞれ立派に名を成しているが、その頃はまだほとんど無名だった多

くの若い友人の訪問があり、そういう連中との賑やかな談論や食事や散歩があった。その中には惜しいかなもうこの世で再会するすべもない友も幾人かいる。しかしそういう昔の懐かしい顔の一つ一つを、今でも私ははっきりと覚えていて。わけてもロマン・ロランの紹介で訪ねて来たフランスの詩人ヴィルドラック夫妻を迎えた時の嬉しさは未だに忘れられない。彼は畑の中の私の小屋をヴェルレーヌの詩で祝福した。私が僧院派の詩人たちの作品を愛してフランスの彼らと心の交わりを結ぶようになったのも、実にそのヴィルドラックとロマン・ロランのおかげだった。

要するにこの詩はそういう生活雰囲気と心境とから生れた物であって、「父よ」の父は言わば私における神を、この世界の創造主を指している。そして詩全体がこの神への感謝と願いと信従とをあらわしたものである。秋と言い、朝と言い、枯葉を落とす木々と言い、川と言い、野に散る小鳥の群と言い、その他すべてが神の造り給うた物、すなわちこの世に在るところの物である。そして「存在」する事こそは嚴肅であり、偉大であり、神の恩寵に値する。従ってこれは私の信仰告白の詩の一つと言う事ができるだろう。

〈編集部註Ⅱ故人〉

Adagio

新川 和江

男たちを思い

かれらの中の

ただひとりのひとを恋うように

木々たちを思い

その中のただいっぽんの木

いいなずに似た因縁の樅の大樹を

この頃のわたしはしきりに恋うようになった

棺桶というものが

樅あるいは檜の板でその六面を蔽うものならば

わたしのために削られるべき木は

わたしが生まれる久しい前から

この世に根を張り

おそろしい緩徐調でゆっくりと伸び繁っている

筈であった

わたしのあずかり知らぬ場所で

わたしの死をたんねんに育てながら

あの時に死んでいけば……

夜更けの床で

目をつぶり わたしは遠い過去をのぞく

小鼻に冷たい汗を浮かし

医師から見放された病気の女の子が臥ている

かぞえ年七才 そう あの時に

死んでいれば とわたしは呟く

遺体に見合った

おさない樅の木が選ばれていたであろうにと

おお 白木の匂いの ういういしさ！

幼女の肌とも見まがう木理の やわらかさ！

眩暈と羞恥におそわれ

わたしはまろびながら夢の森に逃げこむ

そこで年経た樅の木に出会う

お願い どうぞ 早くあなたと一体にさせて！

生き永らえていることは なんと恥多いことでしょう！

暗灰色の幹に額をおしつけると

わたしの死が梢でざわめいているのが聞こえる

打って！ 打って！ 早く釘を！

すると啄木鳥がきて

かりそめの釘を打ちながら言う

何故いそぐの 若者が恋の成就をせくように

死を熟させるのは

ゆっくりとでいいのだよ ゆっくりとで

自作自註

以前に書いた詩について語るのは、遠ざめのした料理を、ふたび火にかけに立っていくような億劫さがつきまとうものだ。

大半がエモーションを母胎にしている私の詩などは、せいぜい煮えたてのホットなうちが身上で、その熱さは作品化されてとどまっているとお世辞を言われても、当人はとうに冷めていて、古い日記をつきつけられたような気恥ずかしさと疎ましさを、味わうのである。むしろ、注文を出されて、へしゃから離れて書いた詩のほうが、私を明らかに多辯にしてくれそうな気がする。

死を主題にした詩を、これまでも私は、いくつか書いている。その中のひとつに、死が、現世で私を私たらしめていた輪郭をほどこいて、私を無辺際存在にしてくれる——つまり、現在の思想といったようなものを、さまざまなイメージに託して並べたてたのち、

けれども墓掘人夫たちは

わたしのかたちに土を掘った

容赦なく

無難作に

きびしいかたちの穴を掘った

——死について——

と結んだ詩があって、当座は、前半の甘っころいナルシズムを、その数行で充分におさえ得たと、得意にはならないまでも、満足していたのだった。ところが、年月がたつうちに、

そんな幼稚な数行で、現実をきびしく凝視し、死を認識したつもりになっているこざかしさが、たいそう厭になってきた。当り前の事柄を、ことさら文字にする必要が、どこにあるう。

十年後の私は、死を、あたかも生のように、リズムのあるものとして表現してみたくなっていた。さきに引いた詩の主調になっている現在の思想を、こんどはまったく逆に、「ただひとりのひと」である男性への婦孺的な恋情という、なまなましいものと置き換えることによって、死に、ほどほどのエロティシズムも帯びせようと、たくらんだ。

そのたくらみが効き過ぎて、読みようによっては、「ただひとりのひと」である男性への、死ほどに重い愛を、最後に抱きとってくれる棺桶Ⅱ樅の木への憧憬という大まかな暗喩を用いて、表現している詩のようにも見える。どちらの読み方をされても、よいのである。この詩の題名は、「死について」でも、「愛について」でもなくて、「アダージオ（緩徐調）」なのだから。

死と愛が、わがちがたく結びついているところに、この詩の特質があるように思う。そうして、散文調ではありながら、散文ではけっして通らぬ、また味わえぬ逸楽を、詩作という過程で、作者がひそかに愉しんでいることも、打ち明けて置かねばならない。

いまふりかかり

坂本 明子

松の花粉は

別の土地の 別の幹に

とけこむ光をかかえていて

松の花粉は

途上ではそのやさしさを

一滴もこぼすまいとして

松の花粉は

雨や霧の記憶をちいさい声で

つぶやくことも忘れて

ただながれていくのです

定着のまえに

旅程があつて

青い空気をやきながら

ながれていくのです

結合のまえに

ひとつずつの重みがあつて

かすかに影ももたない重みであつて

そのままながれていくのです

いっばんの木が

雷鳴をふいにきくとき

花粉のおおっていく道は

枝のなかの沈黙に

やっとなどく

風の炎は そのときいっそうたかまるけれど

待っている松

わたしの領土のどこかへ

根をおろしているだろうに

ながれてくる花粉